

遺族代表の言葉(益城町)

あの日、1年前の4月15日。前日に起きた地震の余震におびえながらも、私たち親子は、明日もあさっても当然のように、決して離れずに暮らせると信じて疑いませんでした。けれどその日が、家族全員が一緒に過ごせた、最後の日となってしまったのです。地震の後片付けに追われ、私たち家族は、暗い台所で懐中電灯の明かりを頼りに、寄り添うようにしてカップ麺を食べていました。ラジオに耳を傾けながら麺をすすっていると、真っ暗だった家に明かりが灯りました。「九電ってすごいね」娘はそう言って、無邪気に笑いました。それでも私は余震の恐怖におびえていました。「2、3日は車の中で寝ようよ」と言う私に「大丈夫だから」と、夫と息子、そして娘は家の中で寝ることにしたのです。そして私だけ、トラックの荷台で眠りにつきました。16日の午前1時ごろでした。のどの渴きを覚えた私は、一旦家の中に入りました。水を飲みながら「揺れも感じないし、静かね。私の取り越し苦労だったかもしれない」そう思っている、私は再びトラックの荷台に戻りました。そしてその数分後、再び、あの震度7の本震が襲ったのです。荷台で激しく揺さぶられながら私は、今、起きている事実を把握することができませんでした。揺れが収まった後、暗闇の中の視界に映ったのは、無残に壊れた家の姿でした。くずれた家の2階の窓から、主人と息子が、娘の名前を呼ぶ声が聞こえてきたのです。私は無我夢中で娘の姿を探しました。そしてくずれ落ちた天井と床の間の1メートルほどの隙間(すきま)に、娘はマットレスごと飛ばされて横たわっていたのです。娘の体に傷はなく、一瞬、気を失っているのだと思いました。3人で「起きろ、起きろ」と娘の名前を呼び続けました。けれど、娘は二度と目を開けることはありませんでした。

一瞬にして私たちから、いとおいしい娘を奪った熊本地震。やり場のない怒りと深い悲しみ、そのつらさと、後悔は筆舌に耐えられません。そしてこの地震で、大切な伴侶、慈しみ育てた子ども、親きょうだい、優しいおじいちゃんやおばあちゃん、大切な友だちを亡くされた方も多くいらっしゃいます。私たち遺族にとって失ったものはあまりにも大きく、ぽっかりと空いた心の穴が埋まることはありません。避難所で、ハウスの中で、小屋の隅で、命をつないだ多くの人たちの「生きる本能」に、人間の強さを見た気がします。そして、人の優しさや思いやりに支えられながら過ごした1年です。悲しみは癒えることはありませんが、私たちが、前へと歩いて生き抜くことこそが、この地震で命を落とした娘や、亡くなられた犠牲者への供養だと思います。現在、解体が進む益城町では、更地が広がりながらも、新しい家も建ち始めています。かつての家並みはなくなっても、また新しい町の姿が生まれようとしています。2度の揺れで私たちの生活を一変させたこの土地は、また、豊かな実りを与えてくれる大切な古里です。多くの悲しみとつらさを乗り越えながら、きっと益城町は、どこよりも防災に強く、人が温かく支え合う豊かな町になるはずです。例年より遅れて咲いた桜が、数日前の嵐にも負けず咲いています。「がんばれ」と背中を押してくれている気がします。最後になりましたが、地震直後から、全国から駆け付けてくださった警察、消防、自衛隊の方々、ボランティアの方々、全国の自治体及び役場の職員の方々、そして寄せられた多くの皆様のご厚意に、深く、深く感謝申し上げます。また、ご自身も被災しながら、人命救助、避難所運営、炊き出しを行っていただいた、区長、消防団を始めとした地域の皆様にも感謝申し上げます。今回の熊本地震でお亡くなりになられた、全ての皆様のご冥福をお祈り申し上げ、追悼のことばといたします。